

◇卒業論文要旨（昭和50年3月卒業生）

相模原市の工業化と水利用の変化

石川文子

相模原市は、神奈川県央北部、東京から40 Km圏内に位置する。その中心部は、現在相模原台地と呼ばれる洪積世台地の上位段丘面上にあり、地下水が深く、井戸掘技術の未発達な時代は水が得にくいため、放置され入会野に利用されていた。（一部狭い地域では新田開発も行なわれたが）。明治には養蚕地帯となり、昭和初期（12年～20年）には、陸軍諸施設が入り込み軍都となった。その時に都市建設区画整理事業が施行され、それが後の工業化・都市化の基盤として先行投資的な役割を果たした。

昭和29年には市制施行し、それに伴い昭和30年に工業誘致条例を制定した。日本の高度経済成長と時期を一にしたため工業化が進展し、現在の内陸工業地帯を形成するに至った。

工場進出の際に水が得にくいという事がどの程度制約を与えたのかを、この論文で考察してみた。

工業化初期の頃は、井戸を深く掘りさえすれば豊富な水が得られた。井戸掘技術も発達したので、非用水型工業にとっては、それ程の支障はなく、それ以外の条件の魅力（安価な土地・交通の便等）に惹かれて進出してきたのである。そのことは、相模原市内という狭い範囲においても、工場の分布と地下水位との比較を行うと如実に示される。市内の工業の中心は北部にある。そこは交通の要衝ではあるが、地下水位の一番深い地域である。

しかし、現在は工業用水の多量汲み上げによる地下水の枯渇（自然地下水位低下5 m以上）と、人口増加による上水道の水不足と、用水の絶対量不足が将来予測できる段階を迎えた。したがって工場の立地条件における“用水”の比重は、以前より大きなものになったと考えることができる。

上尾市の都市化と農業

植野良子

上尾市は埼玉県東部の大宮台地上に位置し東京駅から35 Km、高崎線を利用すると約50分の距離である。この農業は元来主に地形などの自然条件によって支配され麦、甘藷などの畑作が主であった。水田は台地を侵食する小規模な谷にあった（谷津田）が、そこでは摘田が経営されていた。戦後上尾市農業は大きく転換するが、その主な原因の1つは都市化である。

上尾市が本格的に都市化するのには昭和30年代以降であるが、昭和30年代は工場誘致条例施行などの工業化政策の結果工業都市として、昭和40年代は多数の住宅団地が建設された結果住宅都市として都市機能が拡大した。

都市化の進展はまず農用地，特に畑地の減少をもたらした。農地転用も年によって変動があるが年々増加し，田の転用も増えてきている。無秩序な都市化を規制するため都市計画地域が指定されたがあまり見通しは明るくない。農業生産をみると戦後米作が著しく拡大したが農業の選択的拡大が唱えられた昭和30年代の後半から野菜，果樹，畜産が伸び特に酪農が発展したことがわかる。現在はどれも縮小ぎみで，最近麦作の集団機械化栽培がはじめられたが全体に省力化の傾向が顕著である。また農家数の減少が農業人口ほどでないのは兼業化が進展しても完全離農する農家が少ないからであるが，経営耕地規模は全体的に縮小している。工場の進出，東京への通勤距離にあることなど労働市場が近いため第2種兼業農家が圧倒的である。兼業の内訳をみると恒常勤務の雇用兼業や世帯主あとつぎ兼業が多く農業は全体に省力化し，生産性の方はおろそかにされがちである。

上尾市付近は元来後進的農業地域であったが以上のように近年でも全体的に積極性を欠き縮小の傾向が顕著である。しかしその中で少数ながら酪農や施設野菜などに積極的にとりくんでいる人達もいる。

新しい農業の試みをみると第3次産業的情報化時代になっているのに気づく。農業自体の機能についても再考の必要があろう。

いずれにしてもこれから農業経営をしていこうとすると様々の才能や高度の技術が必要とされる。横のつながりをしっかり形成して情報交換などを盛んにし積極的に農業にとりくんでいかねばならぬだろう。

栃木市の都市地理学的考察

碓井澄子

栃木市は栃木県の南西部に位置する人口約8万，面積120 km²の都市である。集落形態のうえでは，市の北西部に位置する足尾山地を南東に流れる永野川がつくった扇状地のうえにできた谷口集落である。都市機能の面から栃木市の発達をたどってみると，まず中世期に城下町として集落形成が開始されたが，近世以降は市場町として特徴づけられる。栃木市が市場町として中心性を増大したのは交通に負うところが大きく，市の中心部を流れる巴波川の水運と江戸―栃木―周辺地域を結ぶ例幣使街道が，栃木市の商業機能を増大させた。明治期にはいるとこうした商業機能のほか，栃木県の県庁所在地として行政機能をも備え，その中心性はますます大きなものとなった。しかし明治も中頃になると，河岸交通は次第に鉄道交通にとってかわられるようになり，鉄道幹線からはずれた栃木市は宇都宮などと比べその成長はやや緩慢となる。この時期に県庁が栃木市から宇都宮に移されたことも，都市成長にとって大きな打撃であったと思われる。昭和35年以降の栃木県内の各都市の成長を人口・商業・工業の面からみると，主要鉄道幹線上の都市（とくに宇都宮と小山）で著しく，栃木市はやや停滞ぎみである。そして県内第2の都市足利が，県都宇都宮とはほぼ独立的に，自律的な成長を示しているのに対し，栃木市はその地理的位置から宇都宮および小山という急成長都市の影響を大きく受けている。そのため栃木市は近隣町村の中心核としての性格をもちながらも，宇都宮や小山に